

Endo Shusaku Literary Museum

母のことを考える

母がまいた種のことを

——日記（一九六七・十一・十三）より——

没後25年
記念企画展



撮影者：稲井勲

遠藤周作 母をめぐる旅

——『沈黙』から『侍』へ



母・郁

[会期] 2021年9月29日(水)～2023年3月24日(金)

[会場] 長崎市遠藤周作文学館 第Ⅱ展示室

長崎市遠藤周作文学館

〒851-2327 長崎市東出津町77番地

TEL.0959-37-6011 FAX.0959-25-1443

■開館時間／9:00～17:00(入館受付は16:30まで)

■休館日／12月29日～1月3日

■料金／一般…360(260)円、小中高生…200(100)円 ()内は10名以上の団体料金

没後25年
記念企画展

遠藤周作 母をめぐる旅

——『沈黙』から『侍』へ

遠藤周作が亡くなって、今年で25年になります。

遠藤は、生涯をかけて「日本人の心に合うキリスト教」を求めました。このテーマを獲得するには、母の存在が大きくかわっており、また多くの作品に母の影響を見てとることができます。

日常生活でも遠藤は母の写真をつねに身近に置いていました。母は、生きているあいだも、亡くなった後も、遠藤を支える存在でした。そうして書かれた遠藤文学の根底には、一貫して母への想いが流れています。

没後25年となる本展では、長崎で一枚の踏絵と出会い、母性的なキリスト教を生涯のテーマとした遠藤が、『沈黙』や『侍』をはじめとする作品で、その問題をどのように文学へと昇華させたのかを、日記や書簡、自筆原稿の推敲跡などを手がかりに明らかにします。



ACCESS

長崎バス「長崎新地ターミナル」発(長崎駅前経由)「桜の里ターミナル(大瀬戸・板の浦)」行きに乗車→「桜の里ターミナル」で、さいかい交通「大瀬戸・板の浦」行きに乗り換え→「道の駅(文学館入口)」バス停下車、徒歩2分。「長崎駅前」バス停から「道の駅(文学館入口)」バス停まで75分。



交通アクセス
マップが見えます

長崎市遠藤周作文学館

〒851-2327 長崎市東出津町77番地
TEL.0959-37-6011 FAX.0959-25-1443
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/endou/>



1974年12月、宮城県石巻市の入江にて(提供:新潮社)



1969年2月、ガリラヤ湖のほとりにて
(撮影:泉秀樹)

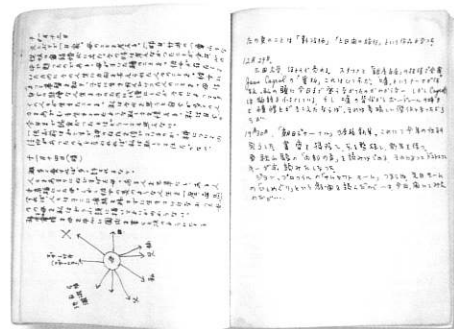
十一月十三日
久しぶりで一日家。母のことを考える。一昨日、竹井の一番小さな従妹の結婚式に出た。その時は考えなかったことが、今日心の中で甦ったのである。母がまいた種のことを。彼女が存在していたためにその人生に方向を与えられた人々のことを。

——日記(二九六七・十一・十三)より



▲「影に対して」草稿

遠藤と父母との関係や父母から受けた影響などが投影された短篇小说。草稿2枚と秘書による清書原稿104枚が、遠藤の没後に発見された。全文は「三田文学」2020年8月号に掲載。



▲日記 1967年11月13日・14日

母を小説に描こうとする意識をうかがい知ることができる。
『遠藤周作「沈黙」草稿翻刻』に所収。

Endo Shusaku Literary Museum